

---

# 友達

永樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

友達

### 【Nコード】

N3545I

### 【作者名】

永樹

### 【あらすじ】

友達は思いがけなくできる。

(主人公と男友達との出会い)

それは俺が高校一年生の冬だった。まだ昇、亮吾と知り合う前の話である。俺達の出会いは唐突だった。今日もやつとだるい授業が終わった。さつさと帰るか。

鞆を片手に一人で教室をでた瞬間。

「のわああ!」

「おわつ!」

「あつ!」

三人の悲鳴が聞こえてきた。誰かとぶつかったようだ。カシャーンという音も付随して聞こえた。

ん?何だこれ。

手に取ってみる。

なんだこの物体は? 冷静という言葉が極めて似合いそうな男も同じように手に取り不思議がっていた。

もう一人の男が慌ててその破片を拾うと

「やつべ!」

「ちよつとお前らこい!」

「なんだ?!」

「おい……!」

その男に俺ともう一人は手を掴まれ、走って連れていかれる。

「おいちよつとなんだ?!」

掴まれた男は言った。

「すまん。来てくれ！先生に追われているんだ！」

走りながら目を後ろにやると、

「こら！またんか！木崎！」

という怒声が聞こえた。

「お前なんで！」

そんな俺の疑問にも返答せず、

「逃げるぞ！」

「何で俺まで!!」「」

「ふうつ。何とか逃げ切れたな」

俺達は屋上まで連れてこられた。

「お前はいいかもしれんが連れてこられた俺達はなんなんだ？」

その通りである。

一斉に説明してくれという表情を俺達は向ける。

「まあまあ落ち着け。順序だてて説明するからな……ええと……」

「俺は宮城亮吾」

「河野裕也」

三人とも同じ一年なのに全く面識はなかった。

俺が他人に興味がないせいかもしれない。

「俺は木崎昇だ。昇ってよんでくれ」

なれなれしいやつだ。自分で初対面の相手に向かって名前を呼んでくれなんて。

「分かった。木崎」

俺は苗字で呼んでやった。宮城も同じように

「そうか。木崎」

「はい、分かりましたよ……」

肩をがくつと落とし、下を向き咳いている。

「ところで、何でお前は俺達を連れてきた」

宮城は少し怒りながら言った。

「それはすまんかった。しかしやむをえない事情があつてな」  
「もつたいぶらずに教えるよ」

いくら待つても説明しださない木崎に俺はしびれをきらした。  
「まず何から聞きたい？」

「ここにこしながら木崎は言う。」

「楽しそうに言うな。こつちは迷惑してんだよ」

この後に及んでこいつはまだもつたいぶりやがる。よほどの理由があるのか？

「全部だ。さつさと言ってくれ」

さつきのミスター冷静そうこと宮城は怒気を声にのせ言った。

「実は先生に追われてんだ」

「見れば分かる。つてか体験した」

あかの他人思わずはもってしまった。

「聞いて驚くなよ？ 実はさ……」

「実は？」

思わず固唾を飲んで木崎の次に出る言葉を待った。

「宿題忘れて追われてたんだ！」

殴つてやるつかこいつ。今ここに芸人かなにかいたら、口でずるつて言いながらこけているところだ。

「で？」

ミスター平静こと宮城もさすがに堪忍袋の緒がなんちゃらといった感じだ。

そんな宮城に気づいてるのかそれとも気づいてないのか木崎は続ける。

「それで宿題忘れて、お前は居残りだと言われたんだ。理不尽だろ？」

「理不尽の理の字もない！」

くそつ、思わず突っ込みまじまったじゃないか。

「お前は理不尽という言葉を馬鹿にしてるのか？ 謝れ」

それはどうかと思うぞ、宮城。

「でさあ、俺は理不尽には屈せず居残りをやるうと思っただけ」

……。

「なんの宿題だったんだ？」

それは俺も気になる。

「美術だよ。あの先生きびしいだろ？ 石垣はほんと名前の通り石

頭だぜ」

「宿題をしない、お前が悪いな」

「同意だ」

「皆冷たいなー。でさ俺は美術室に残ったわけよ。そしてふと思っ  
た！」

「どうせろくでもないことだろ」

「さっさと見えよ」

「俺は何でこんなことをしているのかと！」

「「宿題を忘れたからだ」」

「俺は権力には屈さない！ 報復として俺は美術室の物品を盗もつ  
とした」

権力って言葉にも謝っどけ。

「そこおかしいだろ。お前と話していると頭が変になりそうだ」

頭を押さえながら苦い顔をする宮城。

「同感だ」

誰とも普段は気があわないのにこいつがいると驚くくらい人と気が  
あうな。

「そしてきれいなガラスでできたこれを見つけた」

「今は壊れているがな」

あの時の衝撃で三等分されてしまった。そのうちの一つが俺の手に、  
もう一つが宮城の手にある。

もう一つはこの事件の犯人、木崎の手にある。

「そして、これを持って美術室を出たんだ。するといきなり亀垣に  
みつかってさ。あいつ亀の癖に足は速くてさ」

もう何も言っ気にはなれなかった。

「そして逃げてたら教室前にお前たちぶつかつたわけだ」

「おいちよつと待て。なら何で俺達は連れてこられた？」

俺は思わずこいつの何度目かわからない疑問をぶつけた。

「お前達、その破片もってるじゃん。それ壊れたのばれたらやばい  
と思つて二人を連れてきた」

「……」

「……」

今なら分かるぞ、宮城の気持ちが。

何で俺は拾ってしまったんだ！！

急に手の中にあるこれが憎たらしいものに見えてきた。

「でさ」

その時だった。

バンつと扉の開く音が聞こえた。

視線を向けると、亀垣が血管を浮かせ現れた。

俺と宮城はとっさにその破片をポケットに隠した。

さっきの木崎の話聞いたからだ。

「こんな所に逃げ込んでいたのか、木崎！」

「はいい！」

さっきの威勢はどうしたのやら、すっかり石垣の鬼の形相に怯えて  
しまつていた。

「お前、宿題を忘れただけじゃあきたらず、逃げるとわ！」  
つばをまき散らせながら言う石垣。

こいつ普段から絶対、いや絶対じゃない。

地球が存在するという確率くらい授業態度が悪いだろ！

いやこんなこと言うのは地球に迷惑だな。

ごめんよ、地球。

「お前はばつとしてどぶ掃除でもしとけ！」

何て前近代的なんだ。このご時世にまだどぶ掃除という罰が存在し  
ていたのにびっくりだ。

ご愁傷さま、木崎。

「何だお前らは?!」

鬼がこちらを向いてしゃべっている。その顔に理性という文字は一切ない。

「木崎を逃がしたのはお前らか! お前らも罰として、どぶ掃除だ!」

「俺達は関係ありませんよ!」

「そうですよ!」

「うるさい! □応えするな! 終わったら俺に言いにくい。そして木崎お前は居残りで宿題やれ!」

石垣はそう言つとさっさと帰ってしまった。

「木崎、お前のせいで!」

さすがの宮城も怒っていた。

「宮城、お前を少し賢くしてやろう」

「何だ?」

「これが理・不・尽というやつだ!」

俺達は訳もわからず学校のどぶ掃除をしていた。学校の校門前でやるとどぶ掃除ほど惨めなものはない。

「おい、これは何の罰ゲームだ?」

「宮城違つだろ」

俺は訂正してやる。

「これは何の公開処刑だ?」

校門から出ていく生徒達が見て笑つて出ていく。

「いやしょうがないだろ? 先生に言われたんだから」

「お前がちゃんと言えよよかったんだ」

その通りだ。こいつがちゃんと言えよ俺達はこんな惨めなことはしなくてすんでいたのに。

「すまん! この後牛丼奢るから許して!」

必死に頭を下げる木崎を見て俺も宮城もさすがに反省したかと思いきや木崎を半ば許した。



どれくらい必死にどろかきをしただろつか。今なら罰どころかバイト代をもらってもいいくらいだ。

「やっと終わった」

思わず息をもらす宮城だった。

「ところで皆、お願いがあるのだが」

「またか……」

「お前ろくでもないことだろ？」

本当にその通りである。こんな短期間であったがもうこいつの言いそうなことは把握してきている。

「実はさ……宿題」

「却下だ」

素早く切り捨てる宮城。

「まだ何も言っていないだろ」

「言わなくていい。わかる」

「言ってみるよ」

「宿題を手伝って欲しい……だろ？」

うぐつと言つ木崎。しばし考える素振りを見せこつ言つた。

「違う。俺はこつ言おつとしたのだ。宿題何か先生に聞いてきてくれないか」

「本当なのか？」

怒る準備をしていた宮城を止めた。

「いや正確には違う。正解は両方だ」

「よく意味が分らないんだが」

さすがに黙ってこの状況を見過ごすことはできなくなった。

「いやだから……宿題手伝ってと宿題何か先生に聞いてきてだ！」

「偉そうに言つな。なんだそれは。何で宿題を俺達が聞かなければならない」

「だって……亀垣は宿題のことを前提で話してたけどさー宿題なにか分かりませんなんていつたらどうなるか分かるだろ？」

「お前は一回死んでこい」

「話にならん。俺は帰る」

そう言っつて帰り支度をし始める宮城に対して、

「ちよつとまったー。お前牛丼食えないぞ？」

「どうしてだ。はやくおごれ」

「俺は居残り」

口元を歪ませ、にやりと笑う木崎。

「しまった。全て策のうちだったかー！！」

そうか。木崎ははじめから俺達に宿題をを手伝いをさせざるを得ない状況を作りだしていたのか！

木崎、何という策士ぶり！……貴様は二度死んでこい。

「もういい。ここまでできたんだ、好きにしる！」

宮城がやけになるほどだった。

しかし牛丼いっぱいと泥掃除と宿題が天秤で釣り合うなんてありえないのだが。

そこを見逃している宮城だ。

職員室の前である。

「作戦会議を始める！」

高らかに声を上げ、司令官ぶる木崎がそこにいた。

「作戦何かない。お前は怒られれば済む話だ」

即座に切り捨てる。宮城もなかなか冷たいやつだった。

「もう行けよ」

俺が職員室に木崎を蹴りいれてやる。

おいっ！という悲鳴が聞こえたが、それも亀垣の終わったのかという声のため続かない。

俺達は職員室の外から中の様子をつかがう。

「あっはい。終わりました」

石垣の前ではしゅんとなる木崎も笑える。

「じゃあ、美術室で宿題をやれ」

ここからだ、どう対処する木崎。

「あの先生？ あれ作るんですよね？」

代名詞を使って聞き出す作戦か。悪くない。

「ああ、あれだぞ」

石垣華麗にもこれをスルー。

「あれですよ。ははは……」

「簡単だよ。黒板にものと作り方は書いてあるから見なさい」

「はい！！」

意気揚揚とスキップしながら帰ってくる。

「どうだ？ 俺の話術」

得意顔でそんなときかれてもなあ。

「今のは先生が勝手に言っただけだろ。さ、行くぞ」

三人で美術室にはいる。美術室特有の絵の具の匂いと木の香りが鼻についた。

この時間帯になるともうさすがに美術部員はいないのか。

部屋がきれいに整理整頓されていた。

目的の黒板は一番前にあった。下にタイヤがついている動くタイプだ。

その黒板を見ると、

「鞆を木で作るだ……」

さすがにこれはやりすぎだろ。簡単じゃないぜ。

「「じゃ」」

ガシッと腕を掴まれる。

「頼むよー」

泣きながら土下座してくる木崎に少し引いた。

「分かったよもう！ でもやるからには本気でやるからな！」

冷静と同時に情熱も兼ね備えているらしい。

俺は……。

「河野、お前も本気で作れ」

釘を刺されてしまった。

「通りのこぎりや材料の木などをかき集めてきた。」

「よし、始めるか」

「よし、まず先っぽからだ」

そう言う宮城。

「まずとつてからだろ？」

宮城に意見する。

「何で取っ手何かいるんだ？ 持ち運ぶ気か？」

「持ち運ばずにどうする」

「そんなものみたことないぞ」

「俺は一般的だと思うんだが」

唯一の常識人だと思っていた宮城だがどうやら少し頭がおかしいらしい。

「だってよ……あれ作るんだ」

そう言うって黒板を見る。

「……」

「どうした？」

「なんでもない……。とつてを作ろう」

「はーん。分ったぞー。お前靴じゃなくて靴作ろうとしただろ」

「うぐっ。そんなことは！ ……ない」

語尾に強みがなくなっていていますよ？ 宮城さん。

「そういうことか。納得だ」

「一生の不覚だ……」

「なんともおちゃめなやつだな」

初めは真面目にやるつもり何かなかった。でもやっていくうちになかなか楽しいものだと思った。

人が変わったように宮城は様々な意見を出し、靴作りに協力した。

宮城の意見に俺が意見し、そして木崎が意見する。

それが正しいか皆で議論する。時には宮城の意見は却下され、非難もされた。皆自分の思ったこと言い合った。

その行動が何回繰り返されたか。

俺は……いや皆は真剣だった。

俺もここまで真剣に物事に取り組んだことはない。

俺も宮城ばかりのこぎりをやっていけると進んで代わった。

そして木崎も同様だった。

協力しあった。

皆で一つの物を作りあげる楽しさ。

これを俺は初めて知ったのだ。

そして日も沈みかけどろ掃除から何時間たっただろう。

「完成した……」

そんな木崎の感慨深い言葉に思わず言葉がもれた。

「やった……」

そんな言葉まで言ってしまった。

こんなに汚れちゃった。

服には木くずやらゴミがつきまくっていた。

「さあ、完成したし、先生のところに行くか」

宮城の言葉に一同頷き、職員室へ向かおうとした所だった。

「まだやってたのか？ 木崎。てっきり逃げたのかと思ったぞ」

「先生できました！」

自信まんまんにこたえる木崎が俺達の努力の結晶を手にもっていく。

「どれどれ？」

これは文句ないだろう。誰しもそれを確信していた。

次の先生の褒め言葉を待つ宮城、木崎、俺。

「なんだこれは？ ふざけてるのか」

「なんてこと言っんですか！」

勢いで先生に思わず掴みかかるうとする宮城。

「俺も納得いきません」

堂々といえる。これは完璧だと。

「お前ら何なんだ？」

「いえ僕たちは木崎くんの作るのを見張っていたんです。これが駄目なんて……認めません」

「宮城くんの言うとおりです」

「先生なんで駄目なんですか？」

呆然と聞く木崎。

先生は黒板をちらりと見て、そういうことかと笑い飛ばした。

「なにがおかしいんですか？」

全員その気持ちで一杯だった。

これを見る。先生が黒板の前に行った。そしてくるりと黒板を反転させた。

全員目を見開いたに違いない。

その黒板には本のしおりの作り方と書いてあったからだ。

「簡単だと言ったではないか。木崎お前は間違っつて美術部員の課題をやっていたのだ」

先生はがはが笑っていたが俺達は啞然とするしかなかった。

「まあ。今回は合格としてやる。こんな鞆を作ったんだからな。いい出来だぞ？ 部員も裸足で逃げ出すできだ。じゃあなお前らも帰れよ？ もう外はくらいぞ」

そういう先生は教室から出て行ってしまった。

教室はひっそりと静まりかえった。

そして俺達はゆっくりとお互いの顔を見合わせ

笑った。

教室に誰もいないことをいいことに本気で笑った。死ぬ気で笑った。泣くほど笑った。これほど真剣に、純粹に笑ったことなんかなかった。

「お前、ちゃんと確認しろよ」

笑いながら木崎に言う宮城。

「だってさ、だってさ。そんなこと分かるわけないじゃん」

ひくつきながら答える木崎。

「お前真正のあほだな」

俺も笑い死にそうだった。

「うるせえ。河野も確認しろよ」

「そんなこというな。宮城なんか最初靴作ってたんだぞ」

「もう、それを言わないでくれ」

そして笑った。一人ではない。二人でもない。三人で。

偶然だったのだ。この三人が出会ったのは。

俺がこの破片を拾ったのは偶然だ。もしかしたら別の奴が拾っていたのかもしれない。

宮城にしても同じだ。偶然に偶然が重なって俺達は出会った。

「それにしても……ほんとに楽しかった」

「俺もだ。何で鞆なんか作ってたんだ。理不尽だ」

苦笑する一同。

「変な奴らだなー俺達って」

「こんなおもしろい奴らに出会うなんてこいつのおかげだな」

そう言っつて木崎はガラスの破片を取り出した。

宮城も俺もその破片を取り出す。

不思議だ。さつきまでこれが憎かったのに。

今ではこんなにも輝いている。外の光のせいでは決してない。短時

間だが俺達に至福の時間をくれたもの。

ふと木崎が口にする。

「なあ、俺達友達にならないか？」

「悪くないな。一目ぼれというものがあるなら、一瞬でできる友情

があっても悪くない」

「なに臭いこと言ってたんだ。宮城」

ちげえねえと笑い合う。

友達か……こんな友達も悪くない。心底そう思う。こいつらとなら

学校ではおもしろおかしく生きていける。

絶対ではない。地球が存在する確率ぐらいだ。

誰かがやった訳ではない。

全員でやったのだ。

ゆっくりと各々の欠片を近づけ、そして。かちっという音が心の中で聞こえた。

そして離れ離れの欠片は今一つの形あるものに。

ガラスの人を作った。

まるで鞆を作っている時の俺達の心のように。そらは三つを足した分だけより光って見えた。

「これが俺達の友情の証だ」

「こいつが俺達を出会わせてくれたからな」

「俺達のシンボルだ」

そう俺は言った。そしてポケットにしまいこむ。

「「行くか」「」

「裕也、亮吾」

「ああ。行こうぜ。昇、亮吾」

「そうだな。裕也、昇」

各々が自分以外の奴の名前を呼ぶ。

それほど心地よいものはなかった。

「さて、昇。忘れてないだろうな。牛井」

「げっ。覚えてたか」

「こんなに手伝わせてんだ。特盛りだ」

俺は言った。

「勘弁してー」

もう一度笑い合う。全員で。

鞆は部員の展示棚に置いておいた。何せ亀垣のお墨付きだから。そして三人一緒に廊下に一步を踏み出した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3545i/>

---

友達

2010年12月18日21時49分発行